

Title	長堀祐造先生を送る言葉
Sub Title	In commemoration of Professor Yuzo Nagahori's retirement
Author	櫻庭, ゆみ子(Sakuraba, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Keio Hiyoshi review of Chinese studies). No.14 (2021.) ,p.1- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	長堀祐造教授退休記念号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20210331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

長堀祐造先生を送る言葉

櫻庭ゆみ子

その昔、院生になりたての頃、右も左もわからず闇雲にあがいていた時期、研究室の隅で参考書を見ていた『猫頭鷹』メンバーの一人の先輩に「なぜ文学をやるのですか」と恐る恐る問いかけたことがあった。畏敬の念で崇めていたその先輩から返ってきたのは、「そういう質問はすべきではない」という無然とした答えだった。

あれから三十年余りがたち、しかし、なぜ文学をやるのか、この問いはその時々で文脈を変えつつ絶えず頭の隅で響き続けた／＼している。言葉で成り立つこの分野を対象に扱う者の一人として。特にこの八年、自称「国のリーダー」たちによって一つ一つ言葉が壊されていく信じ難い光景を前にして——多くの名詞、形容詞、接続詞がダメージを受けた。そして今、サブテイカルから戻りスクリーン越しに学生に文学を語りながらも、幾度となく。

文学とは、学術研究の中では「唯一アマチュア的要素を残す分野」とさる研究者が言っていたが、誤解を招きかねないこの謂が意味するのは、文学（研究）がその発露の対象とするのは専門用語を解さない一般の人々であり、文学とは誰もが足を踏み入れてよい領域だということ、いわば日々の生活のすぐ横にあるのが文学だということだ

ろう。この領域を扱う側（対象が同時代に近づくにつれ、それは文芸批評の要素を強くする）から言えば、どれほど精緻なテキスト分析をしようと、抽象領域にとどまるのではなく必ず人間探求という少し土臭い営みへとつながるべきものだ、ということである。

但し扱い手の研究者の側には、科学者が対象に向かうのとは違う種類の、「文字通り」の厳格さが要求される。何が起こったかの事実を追究する伝記、回想録等を読み解く作業を行う場合は特にそうであろう。そしてそこにはまた扱い手の人生態度がより強く反映されるのも他分野と異なる点である。

普段は穏やかで優しく接してくださる長堀氏だが、その著作『鲁迅とトロツキー』をはじめ、『初期共産党群像 トロツキスト鄭超麟回憶録』、『陳独秀文集』等の数々の翻訳のその丁寧な訳注、詳細な人間関係のネットワークを展開するこれらの回想録、文章の書かれた歴史的背景を論じる「解説」、どれ一つとっても一言一句ゆるがせにしない言葉への厳しい姿勢がある。言葉に即しての「文字通り」の厳格さである。

事実を追い資料を収集し分析し、それを誠実に語る。氏の姿勢はある意味歴史家のそれに近いが、個別の事例から歴史の法則を見極めようとするのとは逆のベクトルで、特定の個人に的を絞って心情の「機微」に迫ろうとする点で、語り部、仲介者のような仕事がなされているといえる。まず、「何が起こったか」を追究する時には、推測は極力排除する。すでに起こった過去のことは当事者以外には知りえない。それを第三者として語る場合には、当事者の語りを聞いた周囲の人々の証言が貴重となる。その証言を得るためには嘘のない言葉で語り手や証言者、つまり他者との関係構築を図らねばならない。アーカイブ発掘に勝るとも劣らぬ労力が要求される。そういった証言はまた、当時の状況とそれを第三者に語る際の状況に影響を受け、そして証言を見聞きする私たち読み手の状況が更にかぶさってくる。当然、完璧に「正しい」ことはありえない。そこで問われるのは誠実さである。

資料を集め読み込む作業で対象に寄り添ううちに、人間が人間たる所以の想像力が動き出し、いつしか共感が対象への自己同一化の陥穽に陥る危険が伴う。対象が考えたこと、思ったこと推測したことを、思わず事実として書き込む誘惑が働くのだが、この誘惑を如何に抑え、それに抗い、近づきすぎた対象からいったん身を離し、観察し得たことを書き記す作業に集中できるか、これが学者と似非学者の分かれ目となる。長堀氏は、「事実の語る所を記すことが筆者の義務」（『魯迅とトロツキー』）とさりりと仰り、「事実」にものを言わせる。「想像」の誘惑に引きずられないために必要なのは、足を使って集めた第一次資料から、対象をまきこんだ「事件」の要因、原因を見極める洞察力——これには通時的、共時的両面での知識の蓄積と因果関係の細い糸を見極める集中力・忍耐が要求される。問われるのはやはり、想像、イメージが余計に動こうとする誘惑に屈して自他を裏切る不誠実を徹底的に排除する姿勢、絶えず立ち止まって考え抜く粘り強さ、とどのつまり偽を排する誠実さなのである。膨大な情報を腑分けし論を立てる長堀氏の論証、詳細な注とともに慎重に言葉を選ぶ翻訳には、この誠実な姿勢、そしてその結果示される真実の力強さ、がある。

私たち——近代以降の中国文学を対象とする研究者のみならず——にとって特に今、これがどんなに貴重で勇気づけられるものであることか。言葉に対する誠実さ、これが軽んじられた社会が今現在私たちが置かれた混乱状態であり、そこからは、独裁にいたる少数の支配者と大多数の奴隷から成る抑圧社会か、カオスから一気に破滅へ突き進む「かつて来た道」の再登場があるのみである。氏の著作及び対象に向き合う研究姿勢は、人間存在の抑圧に向かうこの危険性に対する警告をしつかりと示してくれている。

そして、「魯迅にとってすぐれた文芸作品の前提は作家の内面的な自由ということであった」（『魯迅とトロツキー』^②）と、きっぱりと言いつつこの魯迅評価と説得力あるその論証によって、どれだけ魯迅が身近な存在になっ

たことか、これはお伝えしておきたい。対象へと迫るこの姿勢と切り込み方は、また、時代と対象を変えて「言葉の綾」を読み解く作業を試みる際の多くのヒントと指針を私たちに与えてくれるのである。

長堀先生とはよく来往舎の郵便ボックス前でお会いした。「やあ、櫻庭さん」と必ず声をかけてくださる。そのたびにホッとする思いと後ろ暗い気持ち——自身が為すべきことを為していないことに起因する——がないまぜになる、そんなことが繰り返され、二十数年が経った。

長堀先生には慶應で教壇に立つてから今日まで陰に陽に、言葉では言い表せぬほどお世話になった。窮地に陥った時は必ず手を差し伸べてくださった。「これでは意味が分かりません」と、静かにしかし厳しく文章の書き直しを命じられたこともあった。翻訳にはとても細かくチェックを入れてくださった。二回の入院とリハビリを経てブランクの後の「落ちこぼれからさらに落ちこぼれた」苦い思いとともに、なぜ私はここにいるのか、能力欠如ならば去るべきではないか、と人生の折り返し地点をとうに過ぎた歳で情けなくも自問し続けたここ十数年、ご自身の体調がすぐれぬ中で先生がいつも送ってくださる年賀状には「お互いに頑張りましょう」の言葉があった。

今回「送る言葉」を書く任務を「送られ」て、躊躇しつつ、迷いつつ、何度も書き直しながら考えました。

「人間は詰まるところどの世代も順繰りに、魯迅の言うところの「中間物」である。先行世代は次世代以降のために何事かをなさねばならないのである。原発事故を前にして、また混沌する世界資本主義（中国は疑いなくその中心の一員だ）の中で、子供を救い、「未来の世代をして、人生からすべての悪と抑圧と暴力を一扫させ、心行くまで人生を享受せしめ」ることは、私たちの義務であろう」。トロツキーの本当に美しい言葉を最後に引かれて『魯迅とトロツキー』の結びとされた長堀先生。「そういうことですよ、櫻庭さん」ということなのですね。

振り返り難いこの年月をもう一度振り返りつつ、相変わらず非力で能力不足であることを自覚しつつ、少しでも

歩を前に進めていこうと思います。

「今後は魯迅の作品分析をしなければならない」「魯迅の文章には困難な境遇にあるものを勇気づけてくれる何かがある。すぐれた文学の持つ力がある。毛沢東にとってもそうであったように。」と仰られていますね。まだまだ現役の長堀先生、御体調が許す限り、どうか今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします、と述べさせていただきます。

注

(1) 『猫頭鷹…近代中国の思想と文学』『新青年』読書会、一九八三年から一九八九年まで続いた研究雑誌。読書会のメンバーは、当時中国現代文学、中国哲学分野の若き精鋭の研究者たちであった。長堀祐造も名を連ねている。

(2) 今日私たちにとっては当たり前の文学観が、「文学が政治に奉仕する」がテーゼとなった政治状況で右派的思想として否定されてきたのは周知のことである。尚、後の災厄の要因となった「文学」という言葉に誤訳の問題が絡んできたことを指摘したのも長堀論文である。